

## 1月15日（月）その121 渡嘉敷での講話で、私が学んだこと

先週くらいから研究員の動きが活発になっていて、学校へ出かける時間が増えてきました。当然ですね、今週と来週、いよいよ最終の検証授業が佳境に入ります。踏ん張りどころです。しっかりと頑張りましょう。

さて先週の渡嘉敷島への訪問。前日は船が全便欠航で、「いけるかな？」状態でしたが、何とかフェリーが出航してくれました。（感謝！感謝！）

帰りのことも気になったので着替えも3日分準備し、本も2冊、そして島でも執筆ができるよう自分のパソコンも持って行くことにした。（笑）

島尻教育事務所の指導課長の時に、渡名喜小中の総合訪問で、指導主事を5人連れて行ったが、海が荒れ、5日間閉じ込められた経験がある。だってその日が総合訪問の日で、船は出航するのだから、帰りがどうのこうのと言ってはられない。そのために島の学校では数か月前から準備をして下さったのだから。私はためらわずにみんなを連れて船に乗った。結果的に指導主事の皆さんには大変な思いをさせたが、島の側からすれば「よくあること」なのだ。離島校の実践の指導助言に携わる者が、自分は潮水もかぶらずにぬくぬくと、「へき地、離島ではネ・・・」などとうそぶいてはいけない。

交通の便やインターネット等で「島ちゃび」（離島苦）は解消されつつはあるが、依然としてきびしい現実があることを身をもって直視すべきだ。

「最初の部分だけ聞かせて下さい。」と話していた副村長が90分全ての話を聞き、教育長とともに懇親会まで参加して、「あつという間の90分でした。」と言って下さった。懇親会の会場であった民宿のオーナーが朝食の時に、「あんなにたくさんの先生方が同時にいらして下さったのは初めてです。昨日はそちらが引き上げた後も、皆さん盛り上がり過ぎて遅くまでいましたよ。」と、話してくれた。私の訪問のねらいは、達成できたような気がした。

今回私は、琉球国時代から沖縄戦、戦後復興の時代と、渡嘉敷村で暮らした人たちの生き様に触れることができたような思いがする。未来を生きるためには、過去を知らなければならぬと改めて痛感した。先人達が厳しい環境を生きながらえてきたことを心に刻み、その積み上げの上に自分があることを感謝し、今という時間を懸命に生きていかねばならないと思った。

今回私は、沖縄戦における「慶良間での悲劇」をかなり読み込んだ。ある方の話を読み、その方の「体験や思い」に、思いを馳せると涙があふれた。

創立80周年おめでとうございます。阿波連を出て40年の歳月が流れましたが、一日たりとも阿波連のことを忘れたことはございません。阿波連の思い出は、書いても書き尽くせないほどありますが、あの忌まわしい戦争のきずあとがあまりにも深く、頭の中から消えさらずにあります。

多くの教え子達を失い、大変お世話になった村人を失い・・・慶良間、渡嘉敷、阿波連といえば戦争、戦争といえば阿波連とつながり、おそらく一生私の頭の中から消え去ることはないでしょう。

ごめんなさいね。今はダメですが、いつか時が来たら書かせて下さい（一生書けないかも知れませんが・・・）。この手紙を書きながらも、思いだして涙しております。[元教員からの手紙「阿波連小80周年記念誌」より]

## 1月16日（火）その122 差別とヘイト

渡嘉敷から帰ってきて、「座間味村史」や座間味村内の小学校の「100周年記念誌」などを読んでいる。1月25日（木）に座間味村学力向上推進大会で「60分講話」を依頼されたからだ。座間味村史は1989年に作られ、一冊が650ページもある「上・中・下」の全三巻からなる。下巻には「沖縄戦の住民の証言」に多くのページが割かれている。目を覆いたくなるような慶良間戦の住民目線での記述や集団自決のことが生々しく記録されている。

渡嘉敷村史の中にもあったが、日本軍に強制労働をさせられたり拷問をされたりする朝鮮人達を目撃証言があった。本国から強制的に連れてこられた朝鮮人が、奴隷のような扱いを受けていたとする証言は、他の本にもあった。

「米軍ヘリ窓」が落下した普天間第二小学校には、抗議の電話が殺到したようである。「やらせだ、自作自演だ。ねつ造しているんだろう！」、「学校を後から建てたくせに文句を言うな！」などの誹謗中傷だ。

普天間第二小は、1969年に過密化した普天間小の分離校として開校した。飛行場が市域の4分の1を占め、市は「他に場所がなかった」と説明する。そもそも飛行場は沖縄戦のさなか、米軍が住民を追い出して強制的に造ったもの。飛行場のある所には役場や学校、多数の集落があった。終戦後、住民は基地の周辺に住まざるを得なかったのだ。

政府や一部メディアが戦略的に北朝鮮等の脅威をあおってきたように感じる。それが衆議院の自民党圧勝、今年の流行語大賞が「北」だったことにもつながる。そして多くの国民が米軍基地の沖縄への押しつけを黙認している。

日本政府と対立している翁長知事が県外で街頭演説をするとき、「中国に帰れ！」などのヤジがすごいと聞いたことがある。県庁周辺では毎日、翁長知事を攻撃する宣伝カーがまわっている。2013年の東京・銀座でのオスプレイ反対デモでは、デモ参加者が「非国民！」と罵声を浴びせられたという。昨年だったか、東村のヘリパッド移設反対の人に、大阪府警の若い機動隊員が「ボケ、土人が！」、「黙れ、シナ人」と言い放ったこともあった。

大相撲の日馬富士が貴ノ岩への暴行問題で引退に追い込まれた。ワイドショーなどでは執拗に報道していた。今場所鶴竜には「進退をかけて」と報道しているが、同じように休んできた稀勢の里に対しては全く何も言わない。

2016年琴奨菊が優勝したときには、「10年ぶりの日本出身力士の優勝」（NHK ニュース速報）という言葉も出てきた。ちょっと前にモンゴル出身で日本国籍を取得した旭天鵬が優勝したことがある。帰化した旭天鵬がモンゴル出身・日本人なので、「日本出身力士」という言葉が飛び出したのだ。

また稀勢の里と優勝を争っていた照ノ富士が変化技で琴奨菊に勝ったとき、「モンゴルに帰れ！」の怒号のヤジが飛んだそうだ。

大相撲が、「純血を求める国威発動の場」に変わっていないか？オープン化しているテニスやゴルフなどには多くの国の選手が出場するが、技術やフアインプレーに対して惜しめない拍手が送られているような気がする。

純血を求める一部の日本人による少数派への差別が確かにあるように感じる。トランプ大統領が「アメリカファースト」と言っているが、日本人だって「大和民族ファースト」なのではなかろうか。差別を受けてきたはずの沖縄県民ですら、他の国の人たちへの差別には鈍感になってはいないか？

## 1月18日（木）その123 持っているモノがある！

おとといから検証授業が始まりました。最初は渡邊さん、そして二人目は奈美江さんでしたね。指導講師や指導主事の指導を受けながら、大変よく頑張りました。後3人も……来週には「春」が来ますよ。（笑）

さて今日は、検証授業を控えて神経がぴりぴりしている3人がいますので、リラックスできる軽～い話をします。「持っているモノがある」と題して話をしますが、ちょっと自慢話に聞こえるかも知れない。でも私の講話の3大コンセプトの一つ「自己開示」の一環だと思って、お聞きください。

3つの話をします。まず4～5才の頃の話。近所で悪性リンパ腫で亡くなった方がいた。私の母が子ども達の顎の下や脇の下など触って調べてみると、なんと私の体のあちこちに「リンパ腫」（グリグリとかグルイといていた）があるではないか。あっ、でも死ななかつたので安心して聞いて下さい。（笑）

那覇のヤブー（医師の免許を持っていない怪しい人）の所に連れて行かれて、体のあちこちにヤーチュー（お灸）をされた。痛かった。その後ずっと母にフーチバーの苦汁を飲まされ、ヤーチューもされた。小5の時には、県立那覇病院でちょっとした手術をした。首を切られて（笑）リンパ腫を取り出し検査をされて、「良性腫瘍」だと言われた。……アンマー（母）よ。最初から県立那覇病院に連れて行って欲しかったら、あんなにヤーチューされたり、フーチバーの苦汁を飲まされることもなかったのに。

二つ目。私は中3の11月から猛勉強を始めた。中2の頃から「数学の教員になる」と密かに思うようになっていた。そのためには琉大の数学科を卒業しないとイケないこともわかっていた。だから糸満高校に合格することが目標ではなくて、できるだけ上位で合格したいと思うようになった。でも今のように全県的な模擬試験も全くなかったし、離島の中学では交通も情報も遮断されていて、自分の実力がわからなかった。「離島の学校で成績が良くても、那覇に行けばたいしたことはない」という人もいた。そこで11月から、猛烈に勉強し始めた。あのころの渡名喜島は夜の11時に電気が消えたので、その後はローソクを3本立てて勉強をした。8時頃から午前2時～3時くらいまで勉強した。その体験が、高校生になって那覇で一人暮らしをしても、自分一人でも勉強をすることができる習慣を作った。でもローソクの炎はゆれるので、ずっと2.0だった視力が0.8まで落ち「メガネ」になった。

三つ目は、24歳の時の話。新採用の西表・船浮中では、校務分掌が「発電機の担当」でもあった。その年の冬に発電機を起こそうとして、「カクン」と腰を痛めてしまった。病院もないのでほったらかしていたら足がしびれるようになって、石垣市の病院で「椎間板ヘルニア」と言われた。「ウソだろ、まだ独身だぜ！」（笑）と、目の前が真っ暗になった。そのときから整形外科とおつきあいが始まった。20代で、おじい・おばあだらけの病院で腰を牽引するのは、ちと恥ずかしかった。でも部活で自分も筋力を鍛えて時間をかけて克服した。それから36年間、腰痛で仕事を休んだことはない。

61歳までの人生を振り返ると、「持ってるモノがあった！」と思える場面がたくさんあった。あそこで一步間違っていたらと、冷や汗が出る思いもしたことがある。（秘密です!）「知らず知らず歩いてきた 細く長いこの道 振り返れば 遙か遠くふるさとが見える ♪」が、心に染みる年令になった。